

宝塚市自立支援協議会 専門部会「けんり・くらし部会（地域移行グループ）」

令和3年度活動結果報告

I 開催日時

- 第1回 令和3年8月6日（金）出席者13名 13：30～15：20  
第2回 令和3年10月7日（金）出席者14名 13：30～15：25  
委託相談支援事業所2か所3名  
第3回 令和3年12月17日（金）出席者10名 13：30～15：25  
委託相談支援事業所3か所5名 天神川病院相談員2名  
第4回 令和4年2月10日（木）出席者9名（内リモート1名） 13：30～15：00

II 要旨

第1回 けんり・くらし部会 地域移行 Gr（令和3年8月6日）

1. 常任委員紹介

2. 昨年度の振り返りと、今年度の取り組みについて

事務局）今年度部会では「当事者本人の声(思い)を聴く(考える)こと」を、改めて見つめ直し、「“意思決定支援”とは何か？」をテーマに学びを深めていく予定にある。また、けんり・くらし部会【地域生活グループ ワーキンググループ】が作成した小冊子の確認、芦屋市の自立支援協議会が地域移行支援事業促進を目的として作成した動画の視聴を行えないか、との意見から今年度実施の予定にあることを伝える。

部会長）今までの取り組みとして精神科病院に入院している人だけでなく、施設入所で地域に戻れない人がいることも協議してきた。精神科病院では、特に任意入院の人、本来であれば退院できるはずの人が退院できないのはなぜ？という事に問題意識を持った。他に、ピアサポーターの活動についても検討してきた。どのようにご本人の意向を汲み取るかというところで意思決定支援の必要性を考えるという事にも繋がった。他市では、視覚的イメージを持つために動画を作っているところもあり、これを見てみようと思う。今年度はこのようなことを考えているが、他にも意見があれば考えていきたい。

委員）実際に仕事で地域移行支援事業に関わっている。地域移行支援事業に関する動画も作成しており、顔出しで語ってくれている。なんでこの人が十年以上も入院していたんだろうという人もいる。病院には、地域移行支援事業に関するポスターが掲示されていても、患者自身は何をするものなのか知らない為、素通りする。実際に、「一緒に家探しをします」「生活保護が受けられるし一緒に動きますよ」等と伝えていくことが大事になってくると感じる。

委員）長年関わってきたが、「地域移行支援はこういうもの」と分からない。地域にどんな資源があるのかを知るところから始まっていくと思う。わかりやすく示すことも大切と考える。

委員）けんり・くらし部会 地域生活グループのワーキンググループで冊子を作った。文字にはなっているが、わかりやすいものとなっている。地域の資源がたくさん載っている。病院や本人だけでなく、家族や民生委員等、サービスに繋がっていない人等も含め、みんなに見てほしいと思っている。

委員）家族会では、地域移行支援事業、地域定着支援事業、自立生活援助など講演会等で勉強をしている。家族が制度を利用したいと思っても、ハードルが高いように感じる。

事務局）精神科病院から退院している人は多数いるが、制度を使っただけでの退院は本市では数少ない。地域移行支援事業が周知できていないのも課題。支援者側も積極的に使えてはいない。まずは地域移行のイメージを持ってもらうところから始めていくことができたらと思う。

部会長) 市内の相談支援事業所とのつなぎ方が課題、ハードルが高く地域移行の利用につながっていないのでは?との意見。利用したい人を行政が把握し、一緒に動くことができればよいが。

委員) 宝塚市で地域移行支援事業の指定を取っているところは?

事務局) 現在は7か所の委託相談支援事業所が指定を取っている。

委員) 相談支援事業所として、地域移行支援事業を活用しないことにも理由があるのでは?

事務局) 退院支援を行う時、地域移行支援事業を利用する、しないに関わらず再入院をしないための支援を描くことは共通と考える。退院先が決まっている、使う福祉サービスもすでに決まっているとすると、地域移行支援事業のサービス利用はしないと考える。再入院をしないための退院を描いていく時、ご本人の思いも聞きながら進めていくこととなるが、今は地域の相談が動くとき、今は病院と役割を振りながら動くときもある。今は地域移行支援事業を利用しての退院の必要性についても、委託相談支援事業所が月に1回集まり「地域移行を考える会」を発足して話をしている。声をひろいあげる仕組みと共に、どのように地域移行支援事業を活用していくのか、実際の動きも共有しながら検討しているところである。

委員) 地域移行支援事業が利用できる期間はあるのか?利用期間の延長は、市は認めるのか?

事務局) 概ね6か月以内であるが、必要であれば延長は認めている。

部会長) 部会としては、入院しているが地域とのつながりのない人、入院期間が長い人に対し、どのようにお手伝いができるか、どのように相談支援事業所とつなぐことができるかを部会では協議してきた。

### 3. 地域移行を考える会 報告 別紙参照

部会長) 質問や意見があればあげていただきたい。

委員) 今年度からの参加となるので申し訳ないが、なぜ相談支援事業所だけで協議をしているのか?

事務局) もともと、精神科病院に行き、長期入院しているまだ地域の支援者とのつながりを持たない方たちに会いに行く取り組みを行う予定であった。相談支援が核になって動いていくためにも、まずは共通認識をもって取り組むためにも、相談支援事業所で集まることとした。

委員) どの病院でプログラムをやっているのかか決まっているのか?

事務局) A病院を予定していた。

委員) A病院だけなのか?ほかの病院でも取り組む予定はないのか?

事務局) 地域移行グループの協議を通じて、西宮市の相談支援事業所「輪っふる」とのつながりを持つことができ、その輪っふるが病棟プログラムでかわりがあったのがA病院。輪っふるから「他の市でも一緒に取組をしてみないかとA病院が考えている。宝塚市でも一緒にやってみないか?」と声掛けをしてもらったのがきっかけでA病院での取り組みを予定していた。もちろん、いずれは他の病院も含め複数の病院で取り組みができればと考える。ただ、継続性が担保された取り組みであることと、取り組む相談支援事業所自身も実績を積みながら、「宝塚市ではこんな取り組みができる」と自信をもって複数の病院で活動ができるよう、できることから地道にやっていきたいと考える。

A病院での取り組みについては、実際に見学させてもらうところでコロナになってしまい見学がかなわなかった。茶話会やピアサポーター等から地域のことを伝える大集団プログラム、人数を絞った体験や外出プログラムがあると聞いている。

しかし、想定以上にコロナの影響が長期間に亘ってしまった現状で、集団にこだわってはいつまでも病院への取り組みが実施できないと考え、現在は、このコロナ禍でも取れる動きとして、個

別のケースを通して会いに行き、そこから派生して広げていく動きも良いのではないかと考えている。また、参加している各相談支援専門員が個別のケースを通じて感じ得た「困った」「どうしたらいいか」などの共有も地域移行を考える会では行っており、宝塚市の強みとして「みんなで進めていこう」という思いのもと複数の相談支援事業所とで協力しながら進めていきたい。

委員)最近、ホームや就労継続支援事業などに関する相談支援事業所からの問い合わせも増えており、宝塚市の方の退院を各相談支援事業所でも考えてくれているのだなと感じることがある。

#### 4. その他

今年度の会の開催予定について確認を行う。反対意見はなかった。

部会長) 啓発のために使えるようなツールを考えるのも一つかもしれない。いろんな切り口で啓発はできると思うが、まずは知ってもらう、これも一つではないか。また、他市で進んでいるもの、他市の自立支援協議会の取り組みなどの情報を集め、これは宝塚市でもできないかということを考えて行くことも一つかもしれない。何か意見があれば、またあげていただければと思う。

### 第2回 けんり・くらし部会 地域移行 Gr (令和3年10月7日)

#### 1. 新常任委員紹介

#### 2. 地域移行を考える会 報告

事務局より、第9回から第11回の考える会の報告を行う。(別紙参照)

#### 【質疑応答】

部会長：宝塚市における今年度の地域移行支援事業実施件数はどれくらいか知りたい。

事務局：4件くらいだと考える。

部会長：地域移行支援事業の利用は増えてきている感じか？その理由としては、考える会を行う中で意識あるいは周知というものに繋がったなど、会の開催と関係はありそうか？

事務局：地域移行支援事業の取り組みについて、自事業所だけでなく他事業所でも取り組んでいることが共有できてきた。まず、地域移行支援事業を利用して見て、何か疑問などが生じれば考える会で話ができて、確認も取れるという会の雰囲気づくりができてきたように感じている。

部会長：報告書にもあるが、実際に利用してみてメリット、良かったなと思うことはあったか？

事務局：まだまだ動き出したところであり、悩みながらやっているというのが現状。ただ、コロナ禍で何もしないではなく、コロナ禍でもできることを考えながら相談支援事業所として動き、病院と一緒に取り組めることを考えることができてきており、これはメリットであると感じる。

部会長：地域移行支援事業は月に2回病院に会いに行く必要があると聞くが、それを上回るメリットがあると感じられるか？

事務局：会いに行かないことにはやはり何も進まない。ご本人と面と向かって話をし、気持ちを聞いて一緒に動けることはすごく大きなことだと思う。地域移行支援事業の利用については徐々に進めていき、困ったことがあればこの部会や考える会で投げかけていながら進めていくことができると考えている。

副部会長：報告書の中に「病院の考え方の差異」とあるが、実際にはどのようなものか？

事務局：コロナ禍の対応においては病院によって様々である。退院支援の中で必要だからと面会や見学等を許可しているところ、感染予防対策のために全てを制限しているところ等様々ある。

委員：地域移行支援事業は月2回の訪問が定められているが、過去の議事の中では「それが難しい」という話もあったと思うが、当事者の視点で考えると、会ったこともない人に自分の気持ちを

伝えるということは月2回でも少ないくらいである。

地域移行支援事業は、入院中に繋がってくれて話ができる人ができ、地域生活に不慣れではあるがこの人なら退院後も相談できるというふうに繋がることのできる。退院までの関りではなく退院後も関わりが続くものであると考えられる。

部会長：今までの部会の中で何度か話をさせていただいているが、改めて病院の中での声を拾い上げる仕組みがあれば、B病院のことで構わないので教えていただきたい。

委員：医療保護入院の時には退院支援委員会が開催されることになっている。1年以上医療保護入院が継続すると報告書の作成も行う。退院支援委員会は地域の支援者にも参加していただくものとなるが、参加がなくとも作成した報告書は素通りしてしまうという現実もある。

豊中にあるC病院は10月1日から地域移行支援病棟を立ち上げた。医療保護入院の患者に限らず、任意入院患者であっても月2回以上、退院支援委員会を行うこととなっており、この委員会にはご本人の拒否がない限りは地域の支援者にも入ってもらうものとなる。

部会長：この部会でも取り上げてきた任意入院の方は退院支援委員会の対象外となるが、地域移行支援病棟の場合は会議が開かれるのか？

委員：月1回以上会議を持ち、ご本人の退院したい意欲を失わないよう支援していく。

### 3. 「意思決定支援」とは（福島部会長による講義）

部会長：なぜ地域移行グループで意思決定支援なのか、地域移行支援との関係について、意思決定支援の考え方、ポイントを話していく。そして、一つの事例を通し地域移行支援事業で関わったケースから意思決定支援について伝えていく。別紙参照。

#### 【質疑応答】

副部会長：知的障害のある人でイメージしづらい人については代行意思決定で持っていくイメージになるのか？それとも、本人の意思を促す？情報を提供して、本人がどこまでイメージできるか分からないがツールを使ってやっていく感じになるのか？

部会長：確かに重度の知的障害の方には難しいかもしれない。ただ、場面による。「これはいいですか？悪いですか？」等の質問をしながら決めることのできる場面もあると思う。

副部会長：知的障害のある息子にグループホームに行きたくて欲しい時、事前に伝えることをしなかった。さあ今日からという日、日中事業所に行ってそのままグループホームに行く日に、日中事業所に行くことを嫌がった。何も伝えていなくても感じていたのかもしれない。そこで、本人にきちんと伝えた。すると本人は“わーッ”と泣いたが、次の日はいつも通りに日中事業所に行くことができた。まずは伝えるということなのか？

部会長：まずは伝えることが大事。伝わらない、反応がないと決めつけてしまうことはよくない。まずは伝えて本人がどのような反応を示されるのかを確認することが大前提ではないかと思う。

委員：自身は地域移行支援事業にも関わっているが、それ以前の退院促進事業があった時代から地域移行支援に関わっている。病院に行く中で、この人なら退院できるという方にたくさん出会ってきた。ただ、その方たちに話を聞くと「不安だから退院したくない」「親に迷惑かけるから退院したくない」という方にも多く出会ってきた。ただ、どの場面で「退院したい？」と聞いたのか(周りに病院職員がいたり、他の患者がいる場所だったり)、誰が聞いたのかも重要であり、安心安全に思いが伝えられる場所はどこであるかを考える必要がある。

### 第3回 けんり・くらし部会 地域移行 Gr (令和3年12月17日)

#### 1. 精神科病院に入院されている方への取り組みについて

～他市および宝塚市の取り組み～

##### ○芦屋市自立支援協議会作成の動画視聴

事務局) 芦屋市基幹相談支援センターから確認した内容を報告。作成された経緯としては、自立支援協議会の中で地域移行の取り組みとして精神科病院に入院している方への個別の働きかけを行っていたが、このコロナ禍で訪問などができなくなってしまい、その中でもできることとして動画を作成された。2本の動画を作成されており、1本は病院を退院し、グループホームで生活されている方の1日の生活の流れを追った動画。もう一本は社会資源について、ヘルパーや日中の活動の場、相談の場などを紹介するものとなっている。

～動画視聴～

##### ○特定非営利活動法人あすなろ作成の動画視聴

事務局) あすなろから聞き取りした話を報告。コロナ禍となり、D病院での病棟プログラムを行うことができなくなった。コロナ禍でもできる取り組みとして動画撮影をすることとなった。他の精神科病院にて職員研修の際にこの動画視聴をし、地域移行支援事業を知ってもらう機会とした。

～動画視聴～

○宝塚市自立支援協議会けんり・くらし部会 地域生活グループ(ワーキンググループ)作成冊子説明  
地域生活グループ事務局) この冊子は、病院から退院を考えている方に向けて作成をした。当事者、家族に興味を持ってもらう為にも、見やすくわかりやすく作成した。すべての情報を網羅すると情報量が多くなって分かりにくくなってしまふ為、生活情報、仕事情報、医療情報を主とした。また、リハビリ情報も必要だと記載している。冊子は800部刷っており、入院している方が退院するときには困らないための情報冊子とした。宝塚市民の方で入院をされている方に配布を予定。ReMHRADで見ると宝塚市民で151人が対象者。病院相談員を通じて渡すことができたらと考えているが、今後ワーキングで検討予定。なお、小冊子については、インターネットにて「宝塚市、自立支援協議会、けんり・くらし部会」の検索にてホームページ上で確認可能である。

##### ○感想や意見交換

部会長) 冊子は宝塚市民に配布とのことだが、病院側の協力がないと難しい。今後調整となるのか？

委員) 冊子のお披露目からまだ1か月。配布の仕方は工夫が必要と感じている。閉鎖病棟まで届く？  
今までの関係性から広げていく？宝塚市の方が入院されるであろう箕面や茨木にも届けたいと思うが、まだこれからワーキンググループで検討予定となっている。

部会長) 何も説明なく送るのではなく、渡せる関係のあるところからやっていくイメージとなるのか？

委員) 個人的な主観にはなるが…。「私とは違う」と思うと1ページ目を開かない。まずは1ページ目を開いてもらえたら。リハビリページを見て、「この人大変そうやけど退院できたんや。それなら私もできるかも」と思ってもらえたら。また、イラストにも注目してほしい。支えてもらうだけではない、自分も支え手になれる、地域の一員になれることを表している。

部会長) 本当に入院治療が必要のない社会的入院をしている方がたくさんいるということが日本の制度的な問題と言われている。でも、自分の意思で入院を続けている人や、事情があり退院できない人もいる。この人たちが退院できるようサポートするのが地域移行支援事業や、ピアサポーターの活動である。少なくとも本当は、入院しなくても地域で暮らせるであろう人に、本人に「地域で生活したい」と思ってもらうにはどうしたらいいか、前回に話もした意思決定支援が大切になってくる。

委員) 社会的入院は多いのか?

委員) 多い。病院にいれば通院しなくても精神科医が往診してくれる、他の疾患の時にも見守ってくれる、必要な治療がいち早く提供される病院の中という環境。当事者にならないとわからない。

委員) だからこそ、ご本人がそれを選んでいるのか、社会情勢の影響や、ご家族などの周囲の人間がそれを選ばせているのか、というところが問題にはなってくると感じる。ご本人が自身で選んでいるのであればF委員の言う通りと感じるが、周りの状況から選ばざる得ないのであればそれは考えていく必要があるのでは。

委員) いろんな選択肢があるということをどう伝えるか、動画や冊子の活用が考えられるが、せっかく作っても宝の持ち腐れにならないように、どうやってそれを届けるのが良いのか等も考えてみてはどうだろうか。

委員) 医師が退院と言っても、本人が退院するのを嫌と言った場合。一般病院のように医師に「退院」と言われたら「退院」にもっていけるものなのか。

委員) 任意入院の場合、入院して治療を受けるという同意書が2年で期限切れとなる。2年ごとに継続の同意書を書く必要があるのだが、この時が考えるタイミングとなるのではないか。

## 2. 地域移行を考える会 報告

事務局より、第12回から第13回の考える会の報告を行う。(別紙参照)

### 【質疑応答】

部会長) 今後の展開は?

事務局) このコロナ禍でもできることとして、まずは各相談支援事業所が実践している個別のケースを通じて病院との関係を築いていくことや、相談員のスキル向上につながるよう、地域移行支援事業の事例を共有しながら学び合い、相談し合える場として地道に活動を継続していきたいと考えている。

## 3. その他

部会長) 次回は今年度最終の部会となる。その為、振り返りと次年度の方向性を話し合う会となるが、そのほかに何かこれを話したいというものがあればあげてほしい。

委員) 今日説明のあった宝塚の冊子について、どのように活用していくことができるかなど、地域移行グループでも話し合いができたと思う。

部会長) 地域生活グループが作成したものはあるが、地域移行グループとしても考えることはできると思う。

## 第4回 けんり・くらし部会 地域移行 Gr (令和4年2月10日)

### 1. 「ほっと♪たからづか ～こころの病を経験したら～」の活用方法についての意見

(地域生活グループワーキンググループ作成の小冊子)

部会長: 前回は議論をしたが、どのように冊子を活用したらいいのか意見をいただきたい。地域移行グループとしてどう活用していくのかの意見もあればお願いしたい。

委員: 精神科病院に1年以上入院している人に届くことが嬉しいと思う。ただ、この冊子が1年以上入院している人に届いたとしても、病院中心で退院を進めていく形だと難しいとも思う。冊子だけでなく、地域移行支援事業もあるということを伝えるような資料を作ることもありではないか。退院したくても、退院支援がコロナで止まるという事は一般科病棟だと考えられない。この現状を知ってもらう事、啓発も必要ではないかと感じる。

委員: 地域移行グループとして考えるなら、退院したいと思っている潜在的な人に届ける必要があると思う。コロナが明けてからすぐに動けるような体制を作る必要があるのではないかと感じる。

動をされている方や相談支援事業所にも冊子を活用してもらいたいと思う。

部会長：本人に届けるということに意味がある事。ピアの方や地域移行支援事業を行う事業所の方と話をしながら進められたらと思う。

委員：どのような病があろうと個性なのだと思う地域、社会でありたい。

委員：このような冊子は当事者にも必要だが、読み物として一般の人にも読んでもらえたらと思う。こころの病は特別なことではなく誰もが罹る可能性があるもので悪いことでもない。自分と違うところがあっても、自分と共感できる場所も持ってもらえたら。

委員：民生委員の定例会の時に活用できるのではと個人的に思った。

市：そのような方法もあると思う。このような意見があったことを、事務局会議の場で提案してもらおうと広がるのではないかなと思う。

委員：民生委員の理事の定例会には宝塚家族会としても2回ほど参加した。この冊子を使って、家族・当事者が実際に地域で暮らしていく中でこのようなことに困っている、こんなことを手伝ってもらったらできる、回覧板を回すこと一つでもこのような工夫があれば一人でも回すことができたというようなことを伝えさせてもらった。

委員：民生委員として定例会に出ているが、理事会で話されたことが地区の民生委員にまでは届いていない。理事会が知っていればいいとなったのか、個々の民生委員にまでは届いていない。

委員：地域移行支援事業を利用するしないは本人に会ってからの話となるはずだが、以前「地域移行支援事業を使いたい」と家族が障害福祉課窓口で相談に行ったとき、「どこの計画相談に依頼していますか？」など受け付けてもらえなかったことがある。

市：その話が数か月前の話であるのであれば、すでに相談窓口が地区割になっており、委託相談支援事業所が相談に乗ることができるはず。障害福祉課の職員はそのことを分かっているはずであり、委託相談に繋げる必要があると思うので、改善しなければならないと感じる。

委員：市役所に行って相談することは当事者にはとても緊張し勇気がいること。他者が近くにいる窓口で根掘り葉掘り聞くのではなく、後日訪問するなどして、本人が落ち着く場所で話を聞くことをしてくれたらよいのではと感じる。

委員：委員が投げかけてくれたことを整理し、課題解決しないといけない。

部会長：冊子の活用については、生活する場での活用、入院されている方の活用、それぞれで分けて考えていくのも一つの方法かもしれない。地域移行グループとしては、入院中にどのように活用してもらえるのか考える事もできるのではないかな。随時活用について感想や意見があればこの部会でも話ができればなと考える。

## 2. 今年度の振り返りと次年度に向けて

部会長：今日を含めて4回開催してきたが、次年度の進め方について何か意見があれば。

委員：先ほど話があったような実践的な事を取り上げて話し合っていく必要があると感じられる。これからはより実践的な話をしていく時だと思う。なぜ地域移行支援事業が進まないのか、実践から出された課題を考えていく時ではないかなと感じる。委員が話されたことも来年度の取り組みにも繋がっていくと思う。一つの課題として、地域移行支援事業について誰がどのように支援していくのかが周知できていないことが考えられる。考える会の中でも考えてもらいたいことでもあるが、どのようにして当事者が「委託相談支援事業所にサポートして欲しい」という声を伝えてもらえるのかということを考えてもらいたい。また、先ほどの委員からあった話を参考にして、市の窓口から委託相談に繋げるという動きもできる。

個別の話をこの部会でするのでなく、個別の話から共通する課題について話し合う方が良い。考える会の中でも既に上がっている課題もあると思う。また、考える会の中だけで話し合うのではなく、この課題を解決するにはどうすれば良いのかを部会の委員なども一緒に考えることもできればいいのではないかと。地域移行グループと考える会とが連動していければいいのではないかと。

部会長：具体的な課題、個別事案について話し合うというよりは、抽象化した部分について部会で検討して一定の提案みたいな形で考える会などに返していくというのはどうか？といった意見であるが、すでに考える会での課題などは見えている部分もあるのだろうか？

事務局：これまで14回考える会を開催する中で課題として挙げられるものを整理した。まずは地域移行支援事業を活用したことがある相談員が少なく、不安や分からないことが多くあるという声も上がっていること、どのように進めていけば良いのかというイメージを持っていないという声もあった。これについては考える会を通じて他の相談員の経験や情報について共有する機会ともなっており、今後も継続していきたいと考えている。ただ、解決しにくい課題として、1つ目にコロナ禍で会いに行きたくても会いに行けない状況が続いていたこと、病院によってはオンラインでの面談など工夫をしてくれている所もあるが、オンラインでのやり取りが難しい方、直接会って話をすることでご本人の思いや捉え方について察知しやすい方などもおり、ご本人の意向の確認がしづらいことがあること。

2つ目に、見学や体験など今までであればできていたことができにくくなっていること、病院によってまた、対象者によって対応が変わってくるということもあること。

3つ目に、もともと考える会を立ち上げた目的として、本来なら退院できるはずの方が長期にわたり精神科病院で入院を続けておられる。計画相談支援などで元々の繋がりがある方が入院された場合には退院に向け病院の相談員とも連携しながら退院支援を行うことができるが、長期に入院されている方の多くは計画相談等が始まる前に入院されており、地域の支援者とのつながりを持たない方が多くいる。その方たちに会いに行き、声を聴くという取り組みを進めたいと考えていたのだが、このコロナ禍で病院に行けない状況が続いていることが大きな課題として考えられる。

部会長：今挙げてもらった課題の全てを取り上げていくことは難しいかもしれないが、いくつかその中でも優先的に対応していくべき物を挙げてもらうことも良いかもしれないが。

事務局：漠然としたイメージになるが、これまでも考える会の中で実践者の声として挙がってきていることについては部会の中でも報告させてもらってきたが、どうしていけば良いかと悩みながら動いていることもあり、そういったものを委員の方にも聞いてもらい客観的な意見や思いなど協議する場としてこの地域移行グループを活用できないかとも考える。

委員：課題化していくことが大切。例えば先ほどは、「地域移行支援事業の制度を使うためのルートが途切れてしまう」という話があった。そういうことをここで課題として提言して、考える会でも話し合ってもらえるなど良いのでは。

部会長：次年度は具体的な課題について協議して実践者に意見を返していくなどの取り組みができればいいのかと思う。漠然とした課題よりも、なるべく具体的に掘り下げてもらうことでこのグループでの議論もしやすくなるのではないかと感じる。次年度までに時間はまだあるので、詰めていければ、次年度にこの部会でのなんらかの成果物も見えてくるのではないかと感じられる。

委員：考える会への宿題というわけではないが、長期入院の方がどうすれば地域移行支援事業の制度

を使えるのかを考えた時に、きっかけとして何を真っ先にすればいいのかということも話し合っておく必要もあると思う。委員が話していたことにもあったが、窓口で申請しなければ始まらないではなく、申請する手前から委託相談支援事業所などと繋がってもらえることが先ではないかなとも感じる。申請についての支援も相談支援事業所がしてくれるのではないかな。そういった話があったことも次年度部会を開催する前に考える会でも議論してもらってはどうかと思う。

委員：先に繋がることについて、相談支援事業所も忙しいと思うので、決まってからでないかと相談できないかなと考えてしまう。だが、地域移行については家族だけでは全然進まない為、入院が長期化してしまっている方がいる。

委員：だからこそ委託相談支援事業所に繋がってもらいたい。

委員：昨年4月からの委託相談支援事業所が7地区に分かれたことがどれだけ周知されているのか、役割などについても知らないという人が多いのではないかな。

委員：まだ利用という気持ちに至っていない状態で相談して良いのかと心苦しく思ってしまう

市：それをサポートしてもらう為に宝塚市は7つの地区の相談支援事業所に委託をしている。

委員：それでは、その方の住んでいる地域によって、対象の地域の相談支援事業所に相談して、「〇〇病院に入院している方がいるので一緒に動いてもらいたい」ということを相談できるということなのか。これまではどこであれば相談に乗ってもらえるのかを探さなければいけなかったのが、相談の先が決まっているのであれば分かりやすいし、ありがたい。

市：そういった動きが去年の4月からできるようになったということである。

委員：民生委員や自治会、まちづくり協議会などでも地道に知っていくことで、地域移行をしたいという方を気持ちよく迎え入れられるような地域になればと感じた。

部会長：色々な話が出たが、認識のズレなどがあることがわかった。これくらいのことであれば割と簡単に解消することはできるかもしれないが、ただ周知の仕方をどうすれば良いのかについて等は現場の声なども聴きながら協議していかなければならないと考えられる。次年度についてはまずは課題抽出をしてもらった中で何をとり上げていこうかと思うが良いだろうか。

一 同：賛成の意向を示される。

### Ⅲ. 今後の展開

これまで、けんり・くらし部会地域移行グループでは長期に精神科病院に入院されている方の地域移行について、本来であれば退院ができるはずの方が「退院したい」「地域に戻りたい」とならず、入院が継続されている状況にあること、また、そのような声が上がらない現状について話し合ってきた。

また、部会を通じて地域移行支援事業に関する知識の共有を基に協議を重ねてきたが、次年度については地域移行を考える会との連動も視野に、地域移行支援事業の実践から見えた課題等についてを地域移行グループで協議・共有し、実践者に意見を返すことで宝塚市における地域移行支援事業の促進について協議していければと考えている。

## 地域移行を考える会 報告

### 会の目的

令和元年度の地域移行 Gr での協議を通じて、西宮市で先進的に地域移行の動きを進めている“相談支援センター輪っふる”とのつながりを持つことができた。輪っふるでは、以前から“有馬高原病院”への病棟プログラムを行っており、「他の市でも一緒にやってみないかと病院が考えている。宝塚市で一緒に取り組んでみないか」との声をかけてもらった。ただ、現在のコロナ禍により、病院への訪問が進まない状況が続いている。この状況下で、何もできないまま待つのではなく、今しかできないことをしようと考え、まずは宝塚市の委託相談支援事業所で集まることとなった。経緯の説明、なぜこの取り組みが必要なのか、宝塚市では複数の事業所が協力して無理なく継続的な取り組みとしたいことの意識の共有を図ることを目的として、「地域移行を考える会」と題して開催することとなった。

### 第7回

日時：令和3年4月14日（水）13：30～14：30 場所：総合福祉センター 1階 機能訓練室

参加者：市内委託相談支援事業所5事業所から7名

#### ○内容

地域意向を考える会の今後のあり方について意見が挙げられる。

取り組みについてのモチベーションの維持のためだけの集まりではなく、何か持ち帰れるものがなければ時間を割いて参加し続けることは難しい。という意見や、地域移行について話し合える場があることで、分からないことが聞ける、気づきの場になっているとの意見もあり、事前に話し合うテーマを決めておき、共有することとした。

コロナ禍における、地域移行支援の実態について、先進的に取り組んできた「あすなろ」や「輪っふる」での現状を確認し、次回共有することとした。

### 第8回

日時：令和3年6月9日（水）13時30分～14時30分 場所：総合福祉センター 1階 機能訓練室

参加者：市内委託相談支援事業所6事業所から7名

#### ○内容

A 相談支援事業所に話題提供を依頼し、コロナ禍で地域移行支援事業の支給が決定されたケースについて報告をいただく。ケース担当者がコロナ禍での支援の中で感じたこと、困ったこととして

- ・定期的に本人と面談すること（会うこと）の大切さを感じた。
- ・以前は本人も「宝塚に住みたい」と話していたが、更新時期に面談した時には「別に宝塚じゃなくても」と意向が変化。本人のモチベーションの低下、苛立ちも感じられた。
- ・病院への訪問ができず、無駄に半年の期間が過ぎてしまうことになった。

現在のコロナ禍で、病院に会いに行けない状況が続いており、なかなか本人の意向確認ができずに話が頓挫してしまっている現状について困りを感じている様子がうかがえた。

また、事前に聞き取りを行った「あすなろ」「輪っふる」について、あすなろでは、オンライン面会などをうまく活用することでこれまでとはさほど変わりなく、地域移行支援を行っている話があったことを報告。

輪っふるでは、本来の地域移行支援事業利用のうまみである、体験利用、外出活動、それを通じて病院職員が本人の持つ力に気づいてもらえるきっかけとなることを目指しての実施が難しくなり、現状としては、新規の受付はストップしている。ただ、これまでのサービス利用者については、関係性や、モチベーションの維持のために、手紙を書いたり、地域の写真を送ったりしているとも聞いている。

意見交換の中で、病院それぞれで対応は違うものの、オンライン面会などの方法も活用している病院もあり、コロナ禍だからできないではなく、この状況下でも可能な方法で本人とのかかわりを持つ機会作りを考えていくことも必要ではないかとの意見もあった。

スマレンよりコロナ禍での地域移行支援事業を活用した支援を直近に行ったとの話もあり、次回はそのことについて話をうかがいながら、地域移行支援の申請があってから、実際に退院するまでの流れについて、地域移行支援事業の進行表を基に、順を追って確認してみることもとなった。

## 第 9 回

日時：令和 3 年 7 月 21 日(水) 10:00~11:00 場所：宝塚市総合福祉センター 学習室 1

参加者：市内委託相談事業所 7 事業所から計 11 名

### ○内容

参加者が相談支援事業所（計画相談）として担っていたケースを通し、地域移行支援事業を利用した退院支援の流れを再確認する回となった。病院・相談支援事業所・地域移行支援事業所の役割分担を明確にしたこと、ご本人とは入院前から関係性が構築されていたことがスムーズな退院に繋がったとの説明もあり、情報共有等を行うことができた。（実際に地域移行支援事業を行う事業所は入院先の病院にも近い他市の事業所であった。）

## 第 10 回

日時：令和 3 年 8 月 11 日(水) 13:30~14:30 場所：宝塚市総合福祉センター 特別会議室

参加者：市内委託相談事業所 6 事業所から計 10 名

### ○内容

前回、質疑応答の時間を取ることができなかった為、引き続き行う。改めて、ご本人との関係性が構築されていたこと、地域移行支援事業者と対象者の母が顔見知りであったこともあり、速やかな退院に繋がったケースであったことを確認。ただ、地域移行支援事業を利用しなくとも早期退院を描くことは可能であったケースであるため、計画相談として関わったジレンマも語られた。

地域移行支援事業を活用するメリットについて考え、病院による考えの差異はあるが、「退院したい」のご本人の気持ちに寄り添いながら、医師・看護師・相談支援専門員等、皆で退院を目指して動くことや、ご本人が退院について「考える機会」となることは大きなメリットとなること等の意見が出た。

## 第 11 回

日時：令和 3 年 9 月 8 日(水) 13:30~14:30 場所：宝塚市総合福祉センター 特別会議室

参加者：市内委託相談事業所 7 事業所から計 13 名

### ○内容

参加者が現在行う地域移行支援事業について共有。宝塚市の某地域への退院を想定しながら、地域にある社会資源（病院や福祉サービス事業所など）について、他の参加者から情報提供を求める。グループホームや就労継続支援事業所の場所や様子、送迎の有無、作業内容などの情報交換が活発に行われた。

事業所名や所在地、取り組み内容などは自身でも調べることはできるが、実際に相談支援専門員として関わる中で感じた、事業所の雰囲気、利用者の障害種別割合、男女比等の情報も提供されたことで、具体的なイメージに繋げることができた。

## 第12回

日時：令和3年10月13日（水）13：30～14：30 場所：総合福祉センター 3階 学習室1

参加者：8名

### ○内容

テーマ「緊急時の精神科病院への入院対応について。相談支援員としての関りを考える。」

事例提供を基に、参加者で意見交換を行う。（個人情報のため、事例については割愛）

夜間対応や公用車の利用方法、救急車同乗について等、各事業所での対応の在り方や、行政との連携について意見交換を行った。

あわせて、警察介入の動きについて法的根拠があることの確認や、精神科救急情報センターの情報を共有した。

## 第13回

日時：令和3年11月17日（水）13：30～14：30 場所：宝塚市総合福祉センター特別会議室

参加者：11名

### ○内容

テーマ「精神科病院からの退院を考えると、住まいの選択について」

◇各相談支援専門員が考える住まいの場にはどのような選択肢がある？

グループホーム、自宅、施設入所、一人暮らし、転院、救護施設、宿泊型自立訓練、サービス付き高齢者住宅、簡易宿泊所等々それ以外にも様々な住まいの選択肢があることを共有する。

◇ご本人と住まいの場をどのように選択していくのか。その際の悩みや葛藤とは…

- ・地域からの相談で関わりを持つようになったが、本人に会えないまま入院。病院からは自宅退院と話が出てきているが、本人のことを何も知らない中での支援の難しさ。
- ・コロナ禍という理由もあるが、ご本人に面会できないもどかしさ。
- ・本人の意向確認もできない中で、病院側に提案もできない。

## 第14回

日時：令和4年3月15日（火）13：30～14：30 場所：ZOOMにて会議を開催。

参加者：11名

### ○内容

テーマ「宝塚市のピア活動について知る」

◇宝塚市社会福祉協議会が宝塚市から委託されているピアサポート事業について、スマレン担当者の松本氏に説明いただいた。

スマレンでは、ピアカウンセラー（養成講座を受け対人援助に関する研修を受けた人）、ピアサポーター（養成講座は受けていないが、ピアとして活動したいと考えている方）という整理を行っていることが分かる。また、ピアカウンセリングを受けたいと考える方については、まずスマレン担当者に打診、ピアカウンセラーのマッチングなどを行うという流れなどが確認、共有することができた。